

研修報告書no. 5

所 属： 昭和大学病院

研修先： 佐川町立高北国民健康保険病院

2021年6月1日から6月30日までの1か月の間、佐川町立高北国民健康保険病院で地域医療研修をおこない、この度の地域医療研修の報告をさせていただきます。

もともと関西で生まれ育った私は、四国の他の3県は旅行などで訪れたことがありましたが、高知県には初めて訪れました。

研修初日、高知龍馬空港に到着。昼食後に高知市内からレンタカーを借りて、佐川町の高北病院へ向かいました。高知市内から車で離れていくと、みるみる歩いている人は少なくなり、だんだんと道路の道幅が狭くなっていく…。まるで某テレビ番組のダーツの旅へやって来ているような感覚でした。昭和大学の研修医は土佐市民病院での研修が多く、自分以外で近年高北病院での研修をする者が見当たらず、どのような病院でどういった研修なのかの情報もない中であり、期待と不安の思いを抱えつつ研修が始まりました。しかし高北病院の先生方をはじめ、医療スタッフや事務の方々は温かく迎えてくださり、初めに抱いていた不安は杞憂に過ぎませんでした。

高北病院では、主に入院と外来患者の診察や、健診での各種検査、訪問診療などを経験させていただきました。入院と外来患者の年齢は、80代はごく一般的であり、中には100歳前後の患者さんを診察する機会が多くありました。入院患者では、心不全や誤嚥性肺炎、尿路感染症、褥瘡などを、外来患者では高血圧や糖尿病、不眠症などの、加齢に伴う慢性疾患を患っている方々を多く診させていただきました。また地域ならではの患者さんについても見聞きすることもできました。例えば、収穫や休耕の時期だけHbA1cの値が悪化する農家の患者さん、遠洋漁業から帰ってくると血液検査の値がみるみる改善する漁師の患者さん、柿の食べ過ぎによる柿胃石症の患者さんなど…。おそらく東京では出会うことがなかったであろう症例を経験することができ、医療を行うにあたってはいかに患者背景が重要で、それをどうやって問診から引き出していくかを学ぶことができました。

その他にも、初めて病院の検食を経験させていただき、患者さんと同じ食事を食べさせていただきました。NSTラウンドや褥瘡回診にも同席し、褥瘡の創傷治癒にいかに関与が重要か、そのためにどのようにして食形態を工夫し食事してもらうかを学びました。検査室では、検査技師さんに腹部エコーをはじめ、様々なエコーのあて方を教わりました。高北病院では健診もおこなっており、健診結果は未病の状態から判断しその説明を行うことがとても困難を要するものであることが分かりました。外来透析中の患者さんが急変して三次救急病院へドクターヘリの離着場までの搬送に同乗したり、監察医制度のない高知県では病院の医師が死体検案を行っており、実際にその場面を見学させていただいたり、手書きでの処方箋の書き方を学んだりなど、地域の医療現場でしか学べないことも経験することができま

した。

病院以外の高知での生活に関しては、6月は梅雨の季節でしたが、晴天の日が多くありました。佐川町の街並みは、山々に木々が生い茂り、青々とした豊かな自然の風景が視界一面に色鮮やかに彩っており、その風景を眺めながら心穏やかに毎日を過ごしておりました。スーパー、飲食店、ドラッグストアなどの日々の暮らしに必要なお店は揃っており、不便さに悩むこともなく、毎日充実した1か月を生活することができました。

1ヶ月という短い期間でしたが、東京の大学病院では決して学ぶことのできない、地域ならではの医療の現場を実際に経験することができたと思います。高齢化率の高い佐川町の地域の状況は、これから団塊世代が後期高齢者に突入する近い未来の日本の行く先を示唆するものがあり、今後の社会と医療のあり方の上で、ますます考えていかなければならないことがあるように思いました。

最後になりますが、COVID-19の収束が未だ見えぬ状況の中、研修を受け入れ、このような機会を与えてくださった高知医療再生機構の方々、丁寧に指導をしてくださった高北病院の先生方や事務や医療スタッフの方々、自分に関わってくださった全ての皆様に感謝を申し上げたいと思います。1ヶ月間、ありがとうございました。